

生徒の自己実現援助に関する学校心理学的研究(1)

一授業における教師の4種類のサポートを中心として一

茨城県教育研修センター指導主事

山口豊一

**A School Psychological Study on Supporting Students' Self-actualization: From the Aspect of Four Kinds of Support by the Teacher in Class**

**Toyokazu Yamaguchi (Ibaraki Teacher Training Center)**

本研究では、中学校の生徒を対象に悩みに関する調査を行い、学習面で多くの生徒は悩みをもっていることが分かった。そこで、その結果を踏まえ、学校心理学の視点から、一次的教育援助サービスの在り方を究明した。特に、教師と生徒、生徒相互の人間関係を生かした授業を中心として実践的研究を進めた。その結果、授業における教師の4種類のサポートが生徒の学習意欲等を高めるのに有効であることが明らかになった。

キーワード：学校心理学，自己実現，4種類のサポート，授業，人間関係

一次的教育援助サービス

key words : school psychology, self-actualization, four kinds of support, in class, the good relationship

primary educational support

1 主題設定の理由

(1) 中学生の今日的課題

今日、生徒指導の諸問題には、いじめをはじめ、不登校、非行や校内暴力、学級崩壊などさまざまな問題があり、今や、これらの問題状況は、どの生徒や学校にも起こり得るものと思われる。核家族化や少子化の進行、地域社会の変化に伴う連帯感の希薄化など、現在の社会は様々な問題を抱えている。そうした社会状況の中で、生徒については、価値観の多様化、人間関係づくりの未熟さ、生活体験の不足等さまざまな問題が懸念されており、これらが諸問題の背景に複雑に絡み合っていることが考えられる。このような現状において、生徒の学校不適応に対する適切な指・援助をはじめ、一人一人の生徒及びその保護者への望ましい対応の在り方を見いだすための教育相談の充実が叫ばれている。

（2）中学生の意識調査

茨城県教育研修センターは、平成12年11月に、茨城県内の公立中学校（3校、613名、1～3年生）の生徒を対象に悩みに関する意識調査を行った（石隈・山口・萩谷ら、2001）。質問項目は、学習面（8項目）、心理・社会面（6項目）、進路面（5項目）、健康面（4項目）及びその他（2項目）の計25項目について、悩んだ経験やその程度について4件法で調査した。

この図1のグラフは、各領域ごとに「よくある」と「ときどきある」を合計して全員に占める割合を示している。悩みが多い領域を順に見ていくと、学習面（52.4%）、進路面（39.6%）、心理・社会面（32.6%）、健康面（31.9%）、その他（21.5%）となっている。このことは、中学生にとって学習面で悩んだ経験が他の領域で悩んだ経験に比べかなり多いことを示している。

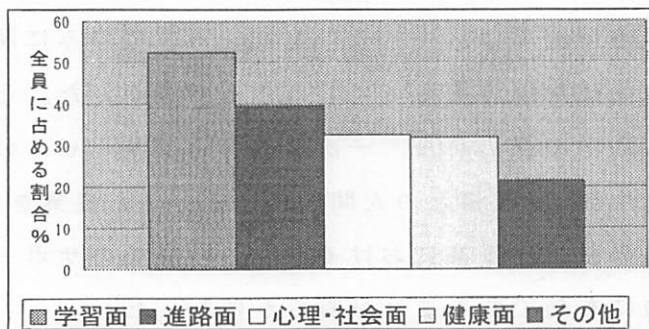


図1 悩みの多さ

次に、学習面の8項目について上記と同様に処理すると、

図2のようになる。悩みの多い項目を順に見ると「何となく意欲がわかず、勉強する気になれない」（74.1%）、「授業の内容が分からない」（67.4%）、「勉強しても、成績が伸びない」（62.0%）、「自分にあった勉強方法が分からない」（60.5%）、「教科の先生の接し方や教え方に不満がある」（49.8%）、「成績や勉強のことで親の期待が重荷である」（39.5%）、「部活と勉強がうまく両立できない」（38.0%）、「不安や悩み事があるために勉強が手につかない」（27.6%）となっている。このことから生徒一人一人は学習面で様々な悩みを持っていることが分かる。

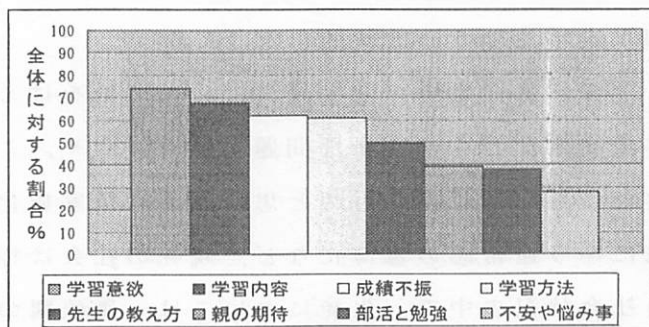


図2 学習面での悩み

（3）生きる力と教育相談的配慮を生かした授業

生徒指導の重要な役割は、一人一人の生徒の人格を尊重し、個性の伸長を図

りながら、同時に社会的な資質や行動を高めることである。その中の、学校教育相談は、すべての生徒を対象とした成長への援助活動である。今日の社会を考えると、学校教育相談が極めて重要な役割を果たすと考えられる。生徒一人一人は、一人の人間として成長への可能性をもっている。生徒にかかわり、受容し、内面から理解しながら、一人一人のニーズに応じることができれば、成長への援助ができると考える。このことを基盤にして、教育相談的配慮を生かした授業を実践することにより、生徒が自分で課題を見つけ、自ら考え、自ら問題を解決していく資質や能力、豊かな人間性、そして、たくましい体と健康を培い、「生きる力」を育成するよう指導・援助することが可能であると考え（石隈・山口ら,2000）。

## 2 研究のねらい

- (1) 学校心理学に関する文献、先行研究等の分析により、人間関係を基盤とした授業の在り方を明らかにする。
- (2) 生徒の自己実現を援助する授業の在り方を、中学校において実践的に究明する。

## 3 研究の内容

- (1) 自己実現を援助する教師のかかわり

### ① 自己実現について

人間は、一人一人、ものの見方・感じ方や生き方が違っている。子どもの学習活動においても、興味・関心、認知・思考のスタイル、学習意欲、学習態度等独自の傾向を持っている。しかし、誰しもより向上したい、よりよく生きたいという欲求をもっている。

ロージャズ(C.R.Rogers,1980)は、「あらゆる生命体は、各水準において内在する可能性を建設的に開花させようとする基本的動向を所有しているということが出来る。人間においても、より複雑でより完全な発達に向かう自然の傾向が存在する。」とし、さらに、「適当な心理的環境をつくってやりさえすれば、この傾向は解き放され、可能性としてとどまっているよりは姿を表してくるものである。」と述べ、カウンセラーが適当な心理的環境（自己一致、受容的態度、共感的理解）をつくってやりさえすれば、クライアントは自己実現へと自ら内在する力によって向かうとしている(C.R.Rogers,1956)。

また、マズロー（Abraham H. Maslow, 1962）は、それぞれの人々がもてる能力や人間性を最高に発揮して生きようとするのが、人間の望みであり、人間の方向性だとし、五つの基本的な欲求からなる人間の欲求の階層説を唱え、「人間は、この欠乏動機による欲求が満たされることにより、真の成長動機から発生する自己実現の欲求が現れる」と述べている。

自己実現とは、「もっている能力や人間性を最高に発揮していこうとすること」であり、それは自分に与えられたものを十分に生かして生きようとする欲求で、人と比較したりするのではなく、主体性をもち、自分のありのままの姿を理解し、受け入れ、その生き方を貫こうとするものであると考えられる。

「生きる力」をはぐくむ指導・援助とは、多様な個性の尊重と主体性の育成を追求するものであるととらえた。教師は一人一人の生徒を信頼し、尊重して、生徒が潜在的な可能性を開花させ、伸長することによって、自己実現を図るよう援助することであると考えられる。

## ② 教師のかかわり

人は関係（環境）によって変わる（田上, 1999）と言われるように、親子の関係、教師や友人との関係、さらには学級の雰囲気や人間関係が、生徒の学習や人間形成に与える影響は大きい。学級では、学級担任と生徒との人間関係が源泉となって、学級の雰囲気が醸成される。とりわけ教師の受容的な態度は生徒との間に民主的で、相互理解的な関係をつくり、さらに、信頼と尊重の関係を浸透させていくようになる。このような関係の中で、生徒は助け合い、協力し合い、問題を解決したり、考えを深め合ったりすることができる。

そこで、教師が一人一人の生徒と、どのような関係をもとうと努力するかが課題となってくる。生徒は、その程度の違いはあるにしても教師に認められたい、好かれたいという願いをもっている。「先生に認められている、好かれている」と意識している子どもは、学校生活に対して積極的、意欲的であるが、反対に「認められていない、嫌われている」と意識している子どもは、学校生活に対して投げやりであったり、反抗的であったりする。

人間関係は相互関係であるから、教師側からの見方、かかわり方だけでなく、生徒が教師をどう見ているか、どうかかわろうとしているかについても、たえず探りながらかかわり方について工夫していくことも大切である。

そして、生徒の欠点や問題点にのみ目を向けるのではなく、小さな努力や工夫、成長などに目を向けてかかわろうとすることである。このようなかかわり方の中で、生徒は自己受容や自己理解・自己指導へと進むことができる。これを学校生活の中で、生徒と教師、生徒相互の関係に生かすことによって、集団の相互作用がいっそう高まることになると考える。また、一人一人の内面に心を傾け、共感しようとして努力し、その場・その時の子どもの気持ちを十分に理解した個別的なかかわり方によって、生徒の思考や表現活動が活発に展開され、さらに意欲的・主体的な活動が展開されるようになると考えられる。

## (2) 授業における教師の心理教育的援助サービス

### ① 教師と生徒の3種類の人間関係

教師による生徒の発達への心理教育的援助サービス（援助活動）を、教師と生徒の人間関係に焦点を当て、石隈ら(1999)の「カウンセリングにおける3種類の人間関係」から考えてみたい。

Beingとは、「自分が自分である」「たった一人の人間として自分が存在する」ということであり、教師は、生徒と自分自身を掛け替えのない存在として尊重することである。すなわち、生徒も教師も一人の人間として自分の人生の主役となることである。

生徒も教師も独自の内的世界をもったトータルな存在であり、人間関係は人間の世界と人間の世界のかかわり合いといえる。

#### ア Being-In：理解者になる<分かる>

「教師が生徒（相手）の世界に入る」という意味で、教師は生徒の理解者として、生徒の世界を生徒の目で見ようとするのである。生徒の世界をよく理解するための第一歩は、生徒の様子を心を傾けて観ることと、生徒の話を心を傾けて聴くことである。生徒を理解するとき、その状況だけでなく生徒の感情に注目することである。そのためには、教師は感情をあらわす語彙をたくさん持つ必要がある。

また、生徒の世界を理解するとき気をつけることは、「自分の価値観を意識的に側において生徒を見る」ことである。素直に観察し、話を素直に聞くためには、自分の価値観をよく知り、それが生徒を理解することを妨げないようにすることである。

そして、生徒理解の最後の決め手は、想像力である。教師であれ保護者であれ、生徒を一人の人間として理解する際に、知識に頼りすぎず、想像力を活用することが大切である。

イ Being-For：味方になる<活かす・育てる>

「援助者が子どものために存在する」という意味。つまり、教師は発達のプロセスで困難な課題に立ち向かう生徒の味方として役に立つことをめざすということである。「教師(I)+生徒(You)=私たち(We)」の感覚で、生徒が「私は一人ではない」と感じることを期待される。

Being-Forの活動をどう整理するかについては、援助者の立場によって様々であるが、ここでは生徒の課題への取り組みにおける問題状況へのサポートという視点から、後述のように4種類のサポートとして整理したい。この4種類のサポートは、援助者が生徒に何を提供するかという、援助者の行動の分類である。Being-Forでは4種類のサポートを通して、生徒の課題への取り組みや問題状況への対処を援助することである。

ウ Being-With：人間として関わる<共に生きる>

教師やカウンセラーは、Being-Inにおいて生徒の考えや感情を理解しながら、生徒が主体性を取り戻すのを援助する。Being-Forでは、生徒の課題への取り組みや問題状況への対処をサポートする。さらに教師やカウンセラーは、自分も一人の人間として生徒に関わることがある。Being-Withは、「あなたと私が一人の人間として共に生きる」Being With Youという意味である。具体的には、教師やカウンセラーの生徒に対する自己開示、自己主張、対決などが含まれる。

Being-Withのタイミングの留意点として、生徒との信頼関係がある程度ついているとき、そして、生徒が情緒的に不安定でないときであり、また、援助者の自己開示や自己主張の内容は、自分である程度解決できることで自慢話にならないように注意することである。

最後に、上述の関わりは援助者の生徒への関わりの3つの側面を表したもので、これらは重なり合うものであり、それぞれ有機的に融合するものであると考えられる。

## ② 授業における教師の4種類のサポート

教師の生徒に対する態度や活動は、一人一人の生徒の学習を成立させていく

うえで根幹をなすものである。そこで、授業の中で達成感や成就感を味わうことができるような生徒に対する4種類のサポートを考えてみる。この4種類のサポートは、教師が生徒に「何を」提供するかという教師の行動による分類であり、情緒的サポート、情動的サポート、評価的サポート、そして道具的サポートがある。

#### ア 情緒的サポート

教師が見方として側にいることで、生徒を安心させ勇気付ける。それは、生徒が伸び伸びと積極的に活動することにつながる。まず、教師が生徒に共感的にかかわることから始まる。たとえば、生徒が発表に詰まったときや失敗したときは、そのことを責めず、教師は生徒の気持ちを共感的に理解し、「大丈夫だよ。」などと声をかけ安心させる。また、元気がない生徒に教師から積極的に声をかける。

次に、生徒の発言を大切に聞き、それを取り上げることは、次への学習意欲を生むことにつながる。意見を中心にして学習に広がりや深まりが生まれることが期待できる。自分の発言を傾聴された生徒は、満足感を覚え学習活動に対して積極的にになると考えられる。

このように、生徒の発言を傾聴するなどの情緒的な支援をすることによって、生徒の意欲的・積極的な学習活動が望める。

さらに、他者から認められたいという欲求は誰でも持っており、低年齢の生徒ほど直接的である。だから、生徒が勉強や部活動にがんばっていることを教師が認めることが大切になってくる。そのためには、個性、すなわち一人一人の興味・関心、学習態度やスピード、学力や能力などの傾向を知り的確に対応する必要がある。

以上述べてきたように、教師が共感的に情緒的な声かけをする、生徒の発言や発表を傾聴する、一人一人の活動を認めるなどの情緒的なサポートを心掛けて授業を行っていけば、児童生徒は、学習活動に取り組む姿勢が意欲的・積極的にになると考えられる。

#### イ 情動的サポート

生徒の学習場面などで必要とする情報を提供することである。児童生徒の知りたい情報をきちんと正確に把握し、必要に応じて提供することが学習意欲を

高めると考えられる。教師は、何度も同じつまづきを繰り返している生徒、学習が不十分な生徒、助言を求めてくる生徒に対して、必要とする情報を提供する事は大切である。これは、生徒が必要とする情報を説明や助言、相談などを通して、生徒は自分自身の学びの在り方や思考過程を自覚することができるからである。教師が授業中に情報提供を意図的に行うことで、一人一人の学習に深まりが期待できる。そのため教師は、生徒の学習過程や思考過程を支援するような情報を提供できるかわりを持つことが大切である。

例えば、「授業で指名して答えられないときヒントを出す」「学習の仕方を教える」「繰り返し説明する」等は情動的サポートである。

#### ウ 評価的サポート

学習者の学習という行動が行われたならば、その結果について正しい行動が行われたかどうか、教師の側からフィードバックをする必要がある。行動のどこが優れているのか、どこに間違いがあるのかなどについて、教師が生徒に知らせることによって、生徒はそれを手掛かりとして自分自身で行動を修正したり、発展させたりできるようになる。教師が勝手な解釈や評価をしてまとめようとする、生徒は困惑する。自分の考えを教師に伝えられない生徒は、教師との関係がますます遠のき授業に対する関心や意欲が損なわれてくる。この評価的サポートの根底には、あくまでも教師と生徒とのよりよい人間関係が働いていることが前提である。留意すべきは、教師の評価の対象は子どもの行動であり、子ども自身（人格）ではないということである。評価的サポートとして授業でよく使われているのは、「君の発表は分かりやすい」「すばらしい考え方だね」など、生徒にとって励みになるような教師の発言である。

#### エ 道具的サポート

生徒に対する具体的な実地的な支援のことである。それぞれの活動場面において、生徒の思考を支える教具としての観察カード、ヒントカード、検討カード、見通しカード等の提供、また、学習形態、座席、環境調節なども道具的サポートである。道具的サポートをすることにより、児童生徒は「先生は気持ちを理解してくれている」「やってみよう」「頑張ってみよう」「自分でもできるかな」などと感じ取り、授業に取り組む姿勢が意欲的・積極的になると考えられる。



以上、4種類のサポートについて述べてきたが、重要なことは、児童生徒どのようなサポートを求めているのかを教師が十分把握しておくことである(山口・石隈・横島,1999)。

例えば、「子どもはいつでも自分の全体を温かく包んでくれること(情緒的)を望んでいるわけではない。ある時にはこれはうっとうしいものである。きちんとした情報だけを得て(情動的)失敗しても自分でやってみたいときもある」(大野,1995)のである。

### (3) 豊かな人間関係を生かした授業と自己実現

豊かな人間関係を基盤として、授業の中で教師の教育相談的姿勢で生徒に接していけば、生徒の学習活動は意欲的になり積極的で、しかも協力的な授業が望めることを論じてきた。主体的・積極的・協力的な学習活動は生徒に達成感や成就感等をもたらし、しいては授業における自己実現を目指す意欲や態度が育ってくるのではないかと考えてきた。自己実現を目指す意欲や態度を育てるような授業を展開するためには、何よりも教師の生徒に対する教育相談的姿勢を根底に据えたサポートが必要になってくる。

人間は、本来、人や集団との関係を通して成長し、社会的に自己実現を図ろうとする傾向をもつ存在である。「人は関係によって変わる存在である。」と言われるように、親子や家族との関係、教師や友人との関係、学級での生徒相互の人間関係は、生徒の人間形成に大きな影響を与えている。学級においては、学級担任と生徒、生徒間の人間関係が基本となって学級の雰囲気を作られていく。そこでは、教師の教育相談的姿勢が基盤となって、生徒間に民主的で相互的な関係が高まり、他者受容が進み、信頼感が醸成されていく。また、授業における教師の教育相談的姿勢は、生徒一人一人の自己理解、自己開示、他者受容、信頼感、役割遂行等を促し学習に対する積極性や主体性を高めると考えられる。すなわち、生徒一人一人が学級での存在感を見だし、安心して自己表出でき、授業に取り組む姿が見られると考えられる。

このように、教師と生徒、生徒相互の人間関係を基盤として生徒の援助ニーズを捉えた授業を心掛けていけば、生徒は主体的に自己活動を高め、積極的でしかも、協力的な学習活動を行い自己実現を目指す意欲や態度が育っていくと考える。それゆえ、教師は生徒の援助ニーズを捉え、教育相談的姿勢で生徒に

効果的な4種類のサポート（情緒的サポート，情動的サポート，評価的サポート，道具的サポート）を意図的に行っていくことが授業における学校教育相談の基本であるとする（石隈・山口・横島,2000）。

#### （4）教師と生徒，生徒相互の人間関係を生かした，協力的な授業実践

##### ① はじめに

数学は，一度理解できなくなるとその先を理解することが難しくなる科目である。理解できないとやる気がなくなり，いっそう分からなくなるという悪循環が生まれ数学をますます嫌いになっている。理由として様々なことが考えられるが，その一つとして，教師が教科書の問題や問題集を生徒に与えそれを説明するといった一方的な一斉授業が多く，生徒の気持ちを考えた教育相談的な配慮をした活動をしていなかったように思われる。さらに，生徒相互の人間関係を生かした授業（お互いに教え合ったり評価したりする場面）がなかったように思える。そこで，生徒相互の協力的な学習を進めさせるとともに，教師の教育相談的配慮のある授業を行うことが必要であるとする。

本研究の授業実践においては，グループ学習の形態をとり，教師と生徒及び生徒相互の人間的な交流を基盤にした教育相談的な考え方を取り入れた授業を試みた。グループ内での問題作成，問題解法についての意見交換，自分の考え方の発表，問題解法の説明，相互評価等，お互いが励まし，賞賛するなど，助け合い学習ができるような授業を行う。その結果，自己開示，他者受容，他者への配慮等の体験とともに，数学の学習に対する安心感，達成感，成就感を味わうことができると考える。そして，教師と生徒，生徒相互の人間関係の深まりとともに学習意欲も高まってくるのではないかと考える。

##### ② 実践研究

###### ア 単元 連立方程式

###### イ 単元について

本単元は，2元1次方程式やこれらを連立させた方程式を解くことの意味を知り，解法を理解し習熟するとともに，それらを実際的な問題の解決に応用することができることをねらいとしている。

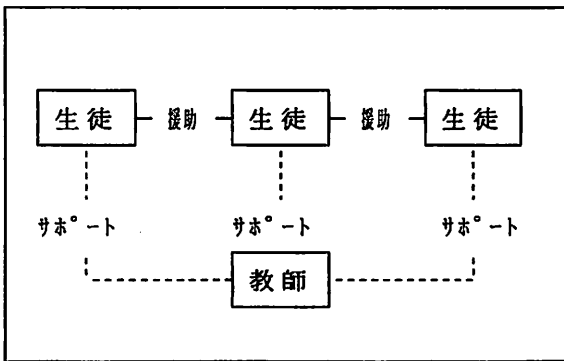
###### ウ 生徒の実態（男子18人 女子16人，計34人）

生徒の学習に取り組む態度は非常に真面目で真剣である。しかし，学習態度

が受け身の生徒が多く意欲的な学習態度とは言えない。また、お互いに協力して学習を進めたり高め合って学習しようとする姿勢が薄いように感じる。

一方、このクラスは4月から学級担任が学級経営の目標として、生徒相互のよりよい人間関係づくりを目指して学級経営を行ってきた。そのため、クラスの雰囲気は良い方である。

エ 学習形態 グループ学習



教師のサポートを受けながら問題作り，解答，考え方の説明，相互評価等を通して，お互いに援助し合う学習をする。

オ 目標

- 方程式の解き方を興味を持って学習し，それを使って実際的な問題の解決に意欲的に取り組もうとする態度を育てる。

(関心・意欲・態度)

- 連立方程式を使って数量や図形に関する実際的な問題を解決するための考え方と手順を理解し，それらの問題を解決することができるようにする。

(数学的な考え方)

- 連立方程式を代入法及び加減法を使って解くことができるようにする。

(表現・処理)

- 連立方程式の必要性やそれらの解の意味を知り，解法を理解し習熟し，それらを実際的な問題の解決に応用できることを理解する。(知識・理解)

カ 学習計画 (14時間扱い，本時はその13時)

(次ページ参照)

キ 本時の学習

(7) 目標

- ・ 連立方程式を使っていろいろな実際的な問題を解決するための考え方とその手順を理解し，問題(生徒作成)を解くことができる。

学習計画

時	学習内容	教師のサポート	学習形態
1 ↓ 6	☆ 連立方程式とその解 ☆ 連立方程式の解き方 ☆ いろいろな連立方程式の解き方	<ul style="list-style-type: none"> <li>・興味のあることやおもしろい話を織り交ぜながら授業をする。</li> <li>・基礎・基本を重視する。</li> <li>・個別指導の時間を多くとり、分からないところを具体的に説明する。</li> <li>・生徒の意見を否定せず聞き、質問しやすい雰囲気作りに努める。</li> <li>・生徒の発表の場を多く設ける。</li> <li>・机間指導の際になるべく声をかける。</li> </ul>	一斉
7	☆ オリエンテーション ☆ グループ作り	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループ学習の意義について説明する。</li> <li>・学習の仕方、流れについて説明する。</li> </ul>	一斉
8 ↓ 9	☆ 問題作り ・計算問題 ・数量に関する問題 ・濃度の関する問題 ・速さ、距離、時間に関する問題 ・その他の問題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教科書、問題集、参考書等を参考にして、グループで相談しながら問題を作るよう指示する。</li> <li>・作成問題数が適切かどうか話し合わせる。</li> <li>・作成問題内容については適切な問題であるかどうか点検する。</li> <li>・問題の印刷、製本についてはグループ毎に協力して行うよう指示する。</li> <li>・難易度別問題（基本・標準・発展）を作成するよう伝える。</li> </ul>	グループ
10 ↓ 11	☆ 解答作り ☆ ヒントカード作り	<ul style="list-style-type: none"> <li>・問題の解答、ヒントカードが適切で効果的かどうかチェックをする。</li> <li>・お互いに知恵を出し合って、わかりやすいヒントカードを作成するよう伝える。</li> </ul>	グループ
12 ↓ 13 本時	☆ 教え合い学習 ☆ 相互評価 ☆ 振り返り用紙への記入	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一人一人の生徒の考え方や感じ方などをできるだけ大切にす。</li> <li>・ヒントカードを利用して友達の質問に答えるように伝える。</li> <li>・困ったとき、行き詰まったとき、お互いに援助し合うことを伝える。</li> <li>・友達の意見や考えを認め合うよう配慮する。</li> <li>・生徒同士の相互評価は、励みになるようなコメントを付けるよう促す。</li> <li>・机間指導をしながら、どんなサポートを必要としているのか把握する。</li> </ul>	グループ
14	☆ 学習の振り返り	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループ学習の良かった点をお互いに述べ合う。</li> </ul>	グループ

・ お互いに援助し合いながら学習を進めることによって、人間関係を深め学習意欲を高めることができる。

(イ) 準備・資料

グループ学習の流れ図 生徒作成問題 ヒントカード 解答

(ウ) 展開

時間	学習活動・内容	教師の生徒へのサポート
前2分	・ 本時の学習の進め方を確認する。	道具・情報 ・ 学習の進め方を説明する。 ・ 学習の流れ図を示す。 情緒・評価 ・ 笑顔であいさつをし、緊張を和らげる。 ・ 元気の悪い生徒に声をかける。
5分	グループ学習の流れ図 問題選択 → 問題挑戦 → 友達からの評価 → 不正解 → 問題作成グループ → 先生に質問 → 先生に個別に指導する。 正解 → 他の問題へ挑戦	・ 興味・関心のある問題を選択する。 ・ 「自力解決不可能の場合」 ・ コメントを付ける。 ・ コメを付ける。 ・ ヒントカードを利用する。 ・ 先生に個別に指導する。
40分	1 本時の学習課題をつかむ。 友達と協力して問題を解いてみよう。 ・ 問題の解き方の手順を確認する。 2 問題を解く。 (1) 興味・関心のある問題を自分で解決する。 (2) 相互評価をする。 ・ 問題を解いた友達を褒める。 ・ 分からない問題を一緒に考える。	・ 問題の解き方の手順を確認する。 ・ 自力解決不可能の場合、友達にヒントを付ける。 ・ 先生に個別に指導する。 ・ 先生に個別に指導する。
後3分	3 本時のまとめをする。 振り返り用紙に記入する。	・ 振り返り用紙に記入する。 ・ 振り返り用紙に記入する。

③ 授業の結果と考察 —— 4種類のサポートの視点から ——

ア 生徒相互の人間関係と学習意欲

授業における生徒相互の人間関係と学習意欲について、どのような関係があるかを明らかにすることをねらいとして授業実践を行った。

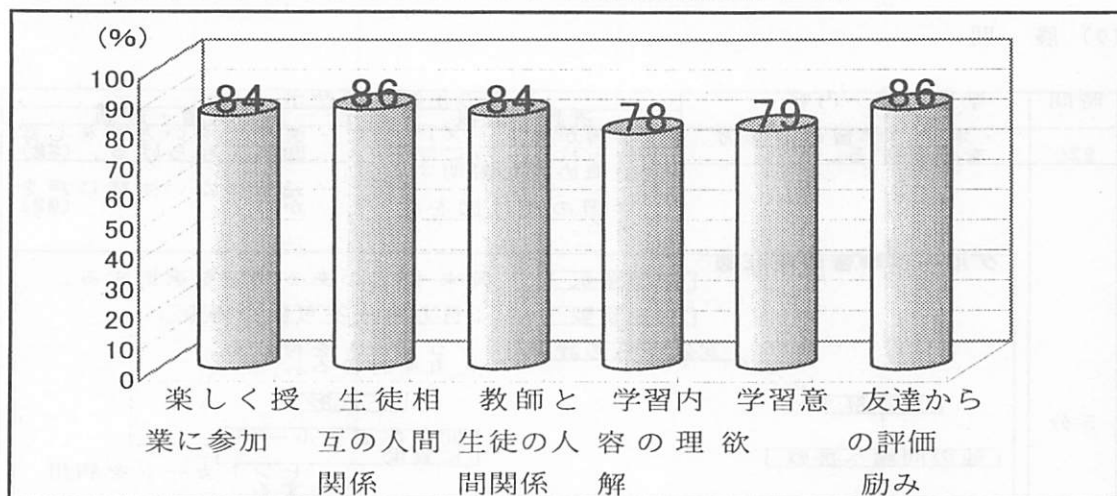


図3 授業後の振り返りアンケート集計結果(平成11年6月30日実施)

授業後の振り返りアンケートの集計結果を示したものが図3である。「はい」と「まあまあ」を合わせると、楽しく授業に参加できた生徒が84%、生徒相互の人間関係が良くなったという生徒が86%であった。今回は、グループ学習の形態を取り、メンバーを仲の良い級友同士で結成し、問題作成、ヒントカード作り、解答作り等をお互いに役割分担をし、助け合いながら行った。仲の良い級友同士ということで授業が横道に反れていくのではないかという懸念はあったが、かえってお互いの親密さが心理的安定をもたらし、活動が活発になったようである。一方、教え合い学習については、自由に発言できるクラスの雰囲気であったため、自己を開示し、抵抗なく友達に質問することができた。教える方にしても、自分たちの作ったヒントカードをもとに親切にアドバイスし、お互いの人間関係をさらに良いものにした。また、相互評価の場面については、友達から自分の解いた問題に丸を付けてもらえ、コメントを書いてもらえることで励みになったと思われる。「あの人と考えが近いから聞いてみよう。」「あの人は説明してくれそうだ。」「あの人は数学が得意だから教えてもらおう。」と言いながらの学び合いの学習は、さらにお互いの人間関係を良いものにし、学習意欲を高めたと思われる。

## イ 教師・生徒の人間関係と学習意欲

### (7) 情緒的サポートから

前出の図3で、教師と生徒の人間関係が良くなったという生徒が84%、学習に意欲的に取り組めたという生徒が79%であった。授業の中で、声を掛ける、励ます、慰める、静かに見守るなどの情緒的なサポートを心掛けて行った。その結果、生徒は学習活動に取り組む姿勢が意欲的・積極的になった。これは、「先生が自分を大切にしてくれている」「分かってくれている」と感じ、授業に安心感を持てたのではないかと考える。

### (1) 情動的サポートから

何度も同じつまづきを繰り返している生徒、学習が不十分な生徒、助言を求めてくる生徒に対して、必要とする情報（ヒントカードを提示する、繰り返し説明する等）を提供した。生徒への必要な情報を説明、助言等を行うことを通して、生徒は自分自身の学びの在り方や思考過程を再確認することができたのではないかと考える。生徒の知りたい情報をきちんと把握し、必要に応じて提供することが学習意欲を高めたと考えられる。また、グループ学習の意義について、学習の進め方についてのオリエンテーションを行ったことにより、生徒が自主的に学習を進めることができたのではないかと考える。

### (9) 評価的サポートから

#### ・ 教師からのサポート

生徒にとって励みになるような評価「すばらしい発表だね」「良くできたね」「すばらしい考え方だね」などの一人一人のよさを大切にされた言葉かけを心掛けた。生徒は先生に認められている、励ましてくれていると思い、「やってみよう」「頑張ってみよう」「自分でもできるかな」と学習に対しての意欲が出てきたように感じられた。また、一人一人の生徒のどこに間違いがあるのか、どこが弱いのか、どこが優れているのかなどについて、机間指導の際に個々の生徒に知らせることによって、生徒はそれを手掛かりとして自分自身で行動を修正したり、発展させたりできるようになった。

#### ・ 友達からのサポート

前出の図3で、友達の評価が励みになったという生徒が86%であった。友達から問題の解法を親切に説明してもらい、丸を付けてもらい、励ましや賞賛の

コメントをもらったことは、一人一人の学習に対するやる気を引きだしたように考える。

#### （I）道具的サポートから

生徒が作成したヒントカードは、教え合い学習をしていく上で非常に役に立った。問題の解き方が生徒のレベルで作成されており、説明の材料として生徒レベルのヒントになっており有効であった。また、学習形態をグループ学習としたことで、役割分担が明確になり、協力して学習する場面が多くなり、お互いの人間関係をさらに高めることができた。

以上、四つのサポートについて学習意欲との関係を述べたが、重要なことは、生徒がどのようなサポートを求めているのかを教師が十分把握する必要があると考える。教育相談的姿勢をもって教師が授業を展開したことで、これまで苦手だった数学の授業を、少しずつではあるが楽しみに待つようになり、意欲的に取り組む姿が見られるようになってきた。

#### 4 研究のまとめ

本研究は、児童生徒の自己実現を援助する学校教育相談の在り方について理論研究、調査研究及び授業による実践研究を行った。理論研究においては、授業における教師の4つのサポートを明確にすることができた。調査研究においては、小学校、中学校及び高等学校の児童生徒相互の人間関係、教師と児童生徒の人間関係及び児童生徒の学習意欲の実態を明らかにすることができた。さらに、児童生徒相互の人間関係及び教師と児童生徒の人間関係と学習意欲との関係を明らかにすることができた。また、実践研究においては、授業における教師の4つのサポートが、児童生徒の学習意欲を高めるのに効果があることが明らかになった。

理論研究、調査研究及び実践研究において、分かったことは次のとおりである。

##### （1）理論研究から分かったこと

① 教師の授業における援助として、4種類のサポートがある。一つは、援助者が児童生徒に関心、信頼、傾聴、指示などの情緒的な働きかけを提供する情緒的サポート。二つは、児童生徒の課題への取り組みや問題解決に役立つ情報、示唆、アドバイス、支持などを提供する情報的サポート。三つは、児童生徒の



課題への取り組みの活動に対して、援助者が評価をフィードバックする評価的支持。四つは、援助者が児童生徒に物品、時間、環境調整による助力を提供する道具的支持。

② 豊かな人間関係を基盤とした授業実践と、児童生徒の学習意欲との間には相関関係がある。

③ 教師と児童生徒の人間関係には、児童生徒の世界を児童生徒の目で見ようとする「理解者になる」、教師が発達のプロセスで困難な課題に立ち向かう児童生徒の「味方になる」、あなたと私が一人の人間として共に生きるという「人間としてかかわる」の3つがある。

## (2) 調査研究から分かったこと

① 児童生徒は、相互の人間関係がよいと認識していると、学習意欲は、41%と高く、逆に、悪いと認識していると、13%と低い。

② 児童生徒は、教師との人間関係がよいと認識していると、学習意欲は49%と高く、逆に、悪いと認識していると、9%と低い。

③ 児童生徒は、教師のサポートの中でよいと思うことは、小学校では道具的支持で、グループ学習、さまざまな実験や作業ができることを挙げている。中・高校では、情緒的支持で、授業の雰囲気作りをしたり、生徒の意見を丁寧に聞いてくれたりする等を挙げている。

④ 児童生徒は、教師のサポートの中でいやだと思うことは、小学校では道具的支持で、授業の進度が速いことや黒板の文字が見づらいこと等を挙げている。中学校では、情緒的支持で、授業の雰囲気が日によって変化したり、生徒の意見を丁寧に聞いてくれないこと等を挙げている。高校では、道具的支持で、生徒を無視した授業の進め方や授業の進度が速いこと等を挙げている。

⑤ 教師は、学習意欲を高めるための配慮として、小・中・高ともに道具的支持が72%で一番高く、情緒的支持は3%と一番低い。③と⑤の結果から中・高校の教師と生徒では、認識にずれがある。

⑥ 教師は、児童生徒相互の人間関係を高めるための配慮として、小・中・高ともに道具的支持が59%で一番高く、情緒的支持は7%と一番低い。

## (3) 実践研究から分かったこと

① グループ活動，構成的グループ・エンカウンターを導入や教師の4種類のサポートにより，教師と児童の人間関係が深まっていった。そのことにより，児童生徒は安心感を得られ，学習に対する取り組み方が積極的になった。そして，児童相互の関係も深まっていった。

② 人間関係づくりをねらいとする構成的グループ・エンカウンターを実施したり，道具的サポート，情緒的サポートを取り入れたりすることで，児童相互の人間関係が深まった。そして，児童生徒一人一人の学習意欲も高まっていることが，児童の観察や振り返りアンケートの自由記述等から分かった。

③ グループ学習を取り入れたり，授業における教師の4種類のサポートを積極的に取り入れることで，授業に対してお互いの人間関係をさらに深めることができた。また，授業を楽しみに待ったり，意欲的に取り組んだりすることができた。

④ 自己主張，自己開示を目的に授業に「ディベート」を導入したり，人間関係づくりの一助とするための構成的グループ・エンカウンターを取り入れたりすることで，児童生徒相互の親密感を高めながら豊かな人間関係を築くことができた。そして，学習意欲を高めることもできた。

## 5 今後の課題

(1) 学校心理学を基に，授業における学習意欲を高めるサポートの在り方を研究する。

(2) 各校種（小・中・高）ごとに，児童生徒相互の人間関係及び教師と児童生徒の人間関係と学習意欲の関係について，具体的項目で検討をする。

(3) 実践研究では，授業における教師の4種類のサポートの関連を明らかにする。

(4) 児童生徒の援助ニーズをより具体的に明らかにする。

(5) 援助ニーズの高い児童生徒への二次的援助サービス，三次的援助サービスの具体的な在り方について究明する。

※ 実践協力者 新治村立新治中学校 教諭 吉岡良治

【引用文献】

- C. R. Rogers 1980 人間尊重の心理学 創元社, 112
- C. R. Rogers 1956 人間関係論 岩崎学術出版, 8-13
- 石隈利紀 1999 学校心理学 誠信書房, 236-252
- 石隈・山口・萩谷ら 2001 教育相談の研究第10集(1年次) 茨城県教育研修センター, 29-45
- 石隈・山口ら 2000 教育相談の研究第9集 茨城県教育研修センター, 8-15
- Maslow, Abraham H. 1962 完全なる人間 誠信書房, 205
- 大野精一 1995 学校教育相談の領域と方法 高校教育展望10月号 小学館
- 田上不二夫 1999 実践スクールカウンセリング 金子書房, 8
- 山口・石隈・横島 1999 第32回日本カウンセリング学会論文集, 271,272
- 石隈・山口・横島 2000 第42回日本教育心理学会論文集, 192

【参考文献】

- 菅野 純 1990 子どもの見える行動・見えない行動ーふれあい学校カウンセリング 歴々社
- 國分康孝 1992 構成的グループ・エンカウンター 誠信書房
- 山内隆久(編) 1988 人間関係入門 ナカニシヤ出版